

第30回東京国際映画祭クロージングセレモニー



第30回東京国際映画祭 各賞受賞作品・受賞者 © TIFF2017



観客賞 大九明子(おおく あきこ) 監督

東京ジェムストーン賞受賞者 左から、石橋静河「映画 夜空はいつでも最高密度の青色だ」、ダフネ・ロー「アケラットーロヒンギヤの祈り」、右上松岡茉優「勝手にふるえてろ」、右下、アデリーヌ・デルミー「マリリンヌ」



トミー・リー・ジョーンズ審査委員長とスペシャルゲスト「不都合な真実 2: 放置された地球」アルゴアさん。二人は長年の友人です。とゴアさん



アジアの未来作品賞、国際交流基金アジアセンター特別賞の2冠に輝く『僕の帰る場所』藤元明緒監督と出演者



右からトミー・リー・ジョーンズ審査委員長、「東京グランプリ/東京都知事賞」に輝いた『グレイン』セミア・カプランオール(監督/脚本/編集/プロデューサー) 小池百合子東京都知事



最優秀芸術貢献賞: ドン・ユエ(『迫り来る嵐』監督/脚本)



久松猛朗 フェスティバル・ディレクター映画祭閉会の辞

第30回東京国際映画祭 受賞作品・受賞者

10月25日(水)に東京・六本木を中心に開幕をしたアジア最大級の映画祭・第30回東京国際映画祭。11月3日EXシアター六本木にてクロージングセレモニーを行い、“東京ジェムストーン賞”含む各賞の発表・授賞式、また、審査委員長のトミー・リー・ジョーンズ氏による【東京グランプリ】作品『グレイン』へのトロフィー授与が行われた。登壇者のコメントと、各賞の受賞作品、受賞者を下記にて報告する。

第30回東京国際映画祭 動員数 劇場動員数：60,589人(上映作品数231本/第29回は206本) TIFFCOM、共催/定型企画動員数：222,039人 レッドカーペット・アリーナ等イベント：111,598人
11月3日(金・祝) 15:00～17:00 EXシアター六本木

<東京ジェムストーン賞受賞者コメント>

※東京ジェムストーン賞：東京国際映画祭のビジョンの一つに掲げた「映画の未来の開拓」に沿って、宝石の原石(ジェムストーン)の様な輝きを放つ若手俳優を東京で見出し、顕彰し、世界に紹介することで、彼らがその輝きを増す一助となることを目的として「東京ジェムストーン賞」を新設しました。東京国際映画祭に出品される全作品を対象として、映画祭事務局が日本と世界の若手俳優(女優、女優を問わず)数名を選出。

●松岡茉優『勝手にふるえてろ』(コンペティション)「この度は東京ジェムストーン賞に選んでいただきありがとうございます。初主演映画『勝手にふるえてろ』で、東京国際映画祭に初めて伺って、こんなに熱くて強い映画祭なのだと感じました。そんな映画祭の第一回の賞に選んでいただき本当に嬉しいです。なので、この手でいただきたかったです、何えす残念です。この映画は少ない人数で少ない時間で撮った映画なのですが、こんなにたくさんの人に見ていただく機会をいただいて、映画の希望や未来を感じました。これからも、一生懸命頑張って映画を明るくしていけるように、日本映画が元気になるように頑張りたいと思います。今回は本当にありがとうございました。またよろしく願い致します。」

●石橋静河『映画 夜空はいつでも最高密度の青色だ』(Japan Now)「今回はこのような賞をいただけて嬉しく思います。私はお芝居を始めてまだ日が浅いのですが、出会

<p>東京グランプリ/東京都知事賞 Tokyo Grand Prix /The Governor of Tokyo Award 『グレイン』"Grain" 審査委員特別賞 Special Jury Prize 『ナポリ、輝きの陰で』"Crater" 最優秀監督賞 Award for Best Director エドモンド・ヨウ Edmund Yeo 『アケラット・ロヒンギャの祈り』"AQ. RAT (We the Dead)" 最優秀女優賞 Award for Best Actress アデリーヌ・デルミー Adeline D'Hermey 『マリリンヌ』"Maryline" 最優秀男優賞 Award for Best Actor ドアン・イーホン Duan Yihong 『迫り来る嵐』"The Looming Storm" 最優秀芸術貢献賞 Award for Best Artistic Contribution 『迫り来る嵐』"The Looming Storm" 最優秀脚本賞 Presented by WOWOWBest Screenplay Award by WOWOW 『ペット安楽死請負人』"Euthanizer"</p>	<p>観客賞 Audience Award 『勝手にふるえてろ』"Tremble All You Want" アジアの未来 作品賞 Best Asian Future Film Award 『僕の帰る場所』"Passage of Life" アジアの未来 スペシャル・メンション Asian Future Special Mention 『老いた野獣』"Old Beast" 国際交流基金アジアセンター特別賞 The Spirit of Asia Award by the Japan Foundation Asia Center 藤元 明緒 Akio Fujimoto 『僕の帰る場所』"Passage of Life" 日本映画スプラッシュ 作品賞 Japanese Cinema Splash, Best Picture Award 『Of Love & Law』"Of Love & Law" "SAMURAI (サムライ)"賞 SAMURAI Award 坂本龍一 Ryuichi Sakamoto 東京ジェムストーン賞 Tokyo Gemstone Award 松岡茉優 (Mayu Matsuoka) 石橋静河 (Shizuka Ishibashi) アデリーヌ・デルミー (Adeline D'Hermey) ダフネ・ロー (Daphne Low)</p>
---	--

う人や出会い作品に恵まれていて本当に幸せだなと思います。これからも努力をすることを忘れずに、頑張りたいと思います。ありがとうございます。」

●アデリーヌ・デルミー『マリリンヌ』(コンペティション)、(メッセージ動画)
「東京の皆さん、こんばんは。アデリーヌ・デルミーです。『マリリンヌ』で東京ジェムストーン賞をいただけるということでとても光栄です。とても誇りに思っていますし、今夜は是非皆さんのところに伺いたいところですが、舞台の公演中で伺うことができません。本当にありがとうございました。」

●ダフネ・ロー『アケラット・ロヒンギャの祈り』(コンペティション)
「女優としてこのような賞をいただくのは初めてです。本当にありがとうございます。東京国際映画祭とは縁があると思います。

実は、三年前に初めて出演した映画で東京国際映画祭に来て、その時はコンペティション部門に入選されました。再びこの作品を携えてやってくることができ、本当に縁があると思います。他3名の素晴らしい俳優(受賞者)たちと一緒にこの賞を受賞することができ、とても光栄に思います。これを励みに俳優として頑張ります。この場を借りて家族や周りの人に感謝を伝えたいです。」

<日本映画スプラッシュ部門>

ナシェン・ムードリー審査委員講評：「まず、審査員として東京国際映画祭にお招きいただきましてことを、感謝しています。とても楽しく過ごすことができました。そしてワクワクするような新しい日本の作品を選んでくださったプログラマーの方々にも感謝します。作品に関する活発な議論を交わす中で、多くの才能と革新性を感じました。」

最終的に全員一致で、大胆に、軽いタッチで、ダイバーシティ、個性、勇敢さ、愛のメッセージを力強く描いた作品を選びました。」

●**作品賞受賞：戸田ひかる監督**「ありがとうございます。期待していたんですけど、びっくりしています。(笑)ドキュメンタリーがコンペティションに選ばれることさえ稀なのに、まさか賞までいただけるとは。ちょっと欲しいなとは思っていたんですが、本当にもらえるなんて思ってなかったのが嬉しいです。素敵なおチームに恵まれたからこそできたことだと思います。大阪で、出演者も YouTube の中継を観ているので、みんなであの瞬間を共有できて良かったです。」

●**観客賞 大九明子 (おおく あきこ) 監督**：「このような愉快的な服装のまま、ご挨拶をするのが少々照れくさいです。(笑)とにかく観客賞をいただくとはまさか思っていなかったもので、先ほど主演の松岡茉優さんもおっしゃってましたが(メッセージ動画内で)大変小さな現場で、小さな組で、短期集中で仕上げた映画でしたので、まさかこのような賞をいただけるとは思っておらず、ノミネート自体も本当に夢のようで楽しい時間を過ごしました。投票して下さった一人一人に感謝していますし、私自身もそういう一人一人のお力があって映画というもの続けてこられたと深く実感しています。映画にしがみついてきて良かったなと思いました。」

＜最優秀監督賞＞

レザ・ミルキヤリミ審査委員 講評：「今日の人間を描くにあたって、クリエイティブな選択による適切な形と説得力のある手法で取り組まれました。最優秀監督賞はエドモンド・ヨウ監督に贈ります。」

●**最優秀監督賞エドモンド・ヨウ監督**「今すごい汗をかいております。まさか選ばれるとは全く思っておりませんでした。私たちクルーは 20 人未満で、自分たちのことを“アケラットファミリー”と呼んでいました。ダフネはこの映画のために詩を書いたりしてくれました。ほとんどのスタッフ

がこの映画に登場します。映画自体は、12 日間雨の中作っていました。情熱をたくさん持っている家族のようなチームに囲まれて作っていたのだけど、周りのスタッフは 20 代で若いので、自分だけ 33 歳ですごく歳を取っている感じがしてしまいました。先ほど私のミューズのような存在であるダフネが、東京ジェムストーン賞を取った時は泣きそうになりました。クルーの皆に感謝をしたいと思います。東京国際映画祭に来まして、普段映画を作っていると一人になったような気になってしまうのですが、世界各国の監督 と知り合いになって、映画を作っている人はみんな家族なのだと強く思います。東京国際映画祭には縁がありまして、私が駆け出しの頃から私の映画を上映してくださって、毎回スタッフの皆さんと会えるのをうれしく思っています。一人の映画人としてこの作品を皆さんに観ていただき、感じていただきたい、やはり世界は平和にならなければいけないと強く思っております。」

＜東京グランプリ / 東京都知事賞＞

トミー・リー・ジョーンズ審査委員長講評：「これから授与する賞なのですが、審査員全員一致で選びました。この美しい撮影法に感銘を受け、神話を現実として捉えている内容が素敵だと思いました。神話の現実、また人々が共通する理解を得ていきまして、神話的な体験を通して、共通の認識を得るという体験です。東京グランプリは『グレイン』に贈ります。」

●東京グランプリ / 東京都知事賞

セミフ・カブランオール監督コメント：「どうもありがとうございます。まず、今回招待して下さった東京国際映画祭、そして審査員の皆様にお礼申し上げます。実は今回の映画は長い旅路を経てきました。というのも製作に 5 年かかりました。そして、今回ここから世界に向かって公開されることになり、ここから世界に向かって広がっていく出発点になると思っております。そして、今回の制作に携わって下さった私の様々な友人たち、チーム、特に俳優のジャン＝マルク・パールにお礼を申し上げます。彼は素晴らしい演技を見せてくれました。本

当にご尽力いただいたすべての方にお礼を申し上げたいです。今とても興奮しています。ありがとうございました。最後に、私たちは世界に様々な害を与えています。私たちが生きていくその全ての瞬間がその理由になってしまっています。その理由には過剰な消費があります。私たちはどこから来たのか、どこに向かっていくのか、こういったことを私たちは把握しなければいけない、理解しなければいけないと思っています。私は監督として大地や種子、そして創造されることに敬意を払いながら作品を作りました。この作品を作ることを神が導いてくれたと思っています。ありがとうございました。」

小池百合子東京都知事：「東京都知事の小池百合子でございます。本日は第 30 回東京国際映画祭に多くの皆様方、お越しくださいます。ありがとうございます。この映画祭の共催をしておりますのが東京都でございます。東京グランプリを受賞されました『グレイン』のセミフ・カブランオール監督をはじめ、受賞された皆様方に改めてお祝いを申し上げます。今年のコンペティション部門は 88 の国、地域から 1538 の作品の応募がございました。これは過去最高の応募数となっております。また、毎年数多くの才能あるクリエイターがこの東京から世界へと羽ばたくことは大変嬉しいことでございます。この映画祭ですが、関係者の皆様のご尽力により、今年で 30 回を迎えることができました。こうした積み重ねが東京の魅力の一つに、また発信源の一つになればと思っております。」

2020 年東京オリンピック、パラリンピックまであと 3 年となりました。これをスポーツだけでなく文化の発信の場として、大いに活用していきたいと思っております。そして世界の人々の心が触れ合う文化の祭典である東京大会、世界を魅了する文化都市へと飛躍する絶好のチャンスでございます。この東京の多様な魅力を伝えるために“Tokyo Tokyo Old meets new”という新たなアイコン、キャッチフレーズを作りました。江戸から続く伝統と最先端の文化、これが共存するのが東京の魅力でございます。このアイコンで東京の魅力を、さらに

強く海外に発信していきたいと思っています。東京国際映画祭がますます発展し、そしてまた、東京の魅力がますます高まっていくことを期待しております。本日はありがとうございました。』

トミー・リー・ジョーンズ審査委員長総評：
「この東京国際映画祭で私が一番楽しかったことは、この審査員の皆さんと友情を築くことができたことです。皆さんとても聡明で思慮深い方々です。そして困難な状況でもありました。というのも、我々が審議をしている際に5つの言語を駆使しておりましたので、その都度通訳が必要でした。それはまるで国連のような状況でした。」

そしてまた、それぞれが違った言語を話すのでユーモアを維持するのが難しかったです。私たちの中で15本の作品をいろいろ観ていくことはできますが、その15本を審査することは大変です。また最良の映画祭というのは、映画製作者や観客を厳しい商業的需要から開放すべきものだと思います。私たちは、カークラッシュやレンズに銃口を向けたり、都市が爆発したり凍ったり、危機に陥っている女性、思春期のスーパーヒーローなども必要としません。それを悪いことだと言っているのではなく、た

だ私たちはそれを必須とみなしておりません。最良であれば、映画祭というのは理路整然とした物語、視覚的な美しさ、そして観客の時間をしかるべき注意と努力で向上させるという映画の持つ責任を開放しません。私たち映画製作者はみなさんの時間を無駄にするために生まれてきたのではなくより良いものにするために生まれました。そして皆さんに対し、謙虚な心と希望をもって仕える者ということをご審査員を代表して申し上げます。』

●**スペシャルゲスト『不都合な真実 2：放置された地球』アル・ゴアさん：**「東京国際映画祭に招いていただきありがとうございます。また、私の作品をクロージング作品に選んでいただき光栄に思っております。また、日本で配給していただける東和ピクチャーズに感謝しています。そして私の旧友、トミー・リー・ジョーンズにまさかここで会えるなんて思っていなかったです。彼とは長年の友人です。是非皆さんにはこの作品を楽しんでいただきたいと思っております。是非見て感じて、これをチャレンジとして受け止めていただきたいです。」

久松猛朗 フェスティバル・ディレクター：

「みなさま今日は第30回東京国際映画祭クロージングセレモニーにご出席いただきまして誠にありがとうございます。まず、最初に各賞を受賞された皆様、本当におめでとうございます。素晴らしい作品をありがとうございました。残念ながら受賞を逃された皆様、どの作品も素敵で、映画の持つ魅力を改めて感じさせていただくことができました。ありがとうございました。多くの作品の中から一本を選ぶという、非常に過酷な任務をやっていただいた審査員の皆様本当にご苦労様でした。本日をもって、無事10日間の開催を終了する運びとなりました。関係者の皆様、作品を持ってお越しいただいたゲストの皆様、本当に多くの方々のおかげでここまでことができました。ありがとうございました。東京国際映画祭は今年で30回目を迎えました。その開催に迎えて、より多様で多彩なプログラムで誰もが参加したくなるような祝祭感あふれる映画祭を目指しました。皆さんが楽しんでいただけたのであれば、大変幸いです。来年はさらに充実したプログラムで皆さんをお迎えする所存です。来年もこの場で皆さんにお会いできることを楽しみにしております。この10日間、本当にありがとうございました。」

コンペティション国際審査委員&受賞者記者会見

「コンペティション国際審査委員&受賞者記者会見」は、EXシアター六本木2Fカフェにてクロージングセレモニー後に行なわれた。

登壇者は、コンペティション国際審査委員：トミー・リー・ジョーンズ審査委員長、レザ・ミルキヤリミ、マルタン・プロヴォ、ヴィッキー・チャオ（趙薇）、永瀬正敏。各賞の受賞者：日本映画スブラッシュ部門作品賞：戸田ひかる（『Of Love & Law』監督）。アジアの未来部門 作品賞・国際交流基金アジアセンター特別賞：藤元明緒（『僕の帰る場所』監督／脚本／編集）。コンペティション部門 最優秀脚本賞 Presented by WOWOW：ヤニ・ポソ（『ペット安楽死請負人』プロデューサー）観客賞：大九明子（『勝手にふるえてろ』監督）最優秀芸術貢献賞：ドン・ユエ（『迫り来る

嵐』監督／脚本）。最優秀男優賞：ドアン・イーホン（『迫り来る嵐』）。審査委員特別賞：シルヴィア・ルーツイ（『ナポリ、輝きの陰で』監督／脚本／プロデューサー／編集）。ルカ・ベッリーノ（『ナポリ、輝きの陰で』監督／脚本／プロデューサー／編集）。最優秀監督賞：エドモンド・ヨウ（『アケラットーロヒャンギヤの祈り』監督／脚本）。東京グランプリ／東京都知事賞：セミフ・カブランオール（『グレイン』監督／脚本／編集／プロデューサー）。

トミー・リー・ジョーンズ審査委員長：「まるで一本の映画を撮り終えた後の打ち上げに参加している気分です。この映画祭期間中、映画作りと同様でみんなと一緒に仕事をして、それが終わった今は、友達も作れてとても良い経験となりました。またどこかの映画祭でばったりお目にかかると思いますが、今はただただ嬉しいです」

レザ・ミルキヤリミ：「トミー・リー・ジョーンズさんと同じ気持ちで、良き友達を見つけてとても嬉しいです。これからも素晴らしい作品を観られる事を期待しています。映画祭に出るチャンスのある映画は全て受賞する可能性のある立場だと思います。皆素晴らしい映画で審査する事はとても難しく、審査委員それぞれの好みや意見がある中、意見を合わせるのは困難なことが多いです。いつも100パーセント合意する事は難しいが、今回はそれが出来たと思っています」

マルタン・プロヴォ：「本当に貴重でインパクトの強い経験となりました。他の映画祭にはない東京国際映画祭だからこそ、素晴らしい審査委員をさせてもらいとても感謝しています。それぞれが現在の世界の状況を描写して、色んな不安が描かれていたが、これから取り組むべきこともたく



コンペティション国際審査委員&受賞者記者会見 © TIFF2017

さんあるなと感じました。映画監督がそれを描写して問題提起をして人々の意識を高め、これから世の中が光と愛に溢れる方向に向いていければすごく嬉しいです」

ヴィッキー・チャオ (趙薇) :「この東京国際映画祭は非常に開かれた映画祭だと思います。どの作品にも我々審査委員に対してもとても良くしてくれて、良い作品を観ることができて嬉しく思います。5つの国の国際審査委員団で映画を観て、議論して、インスパイアし合うことが出来ました。このような機会を与えてくれた東京国際映画祭に感謝しています」

永瀬正敏 :「25日のオープニングの日に審査委員長から、『1作観るごとに必ずミーティングをしよう』という提案がありましたが、それが本当に素晴らしい提案でした。他の映画祭の審査委員に聞くと、そんなことはまずないとのこと。映画を観てすぐに話し合うことで共通認識を持って様々なアイデアを引き出すことが出来たことに感謝しています。この出逢いを生涯大事にしたいですし、他の審査委員の皆さんは監督で、僕は役者なので今後役者として起用してもらえるように頑張っていきたいです」

Q : トミー・リー・ジョーンズ審査委員長はなぜ1作品観るたびにミーティングすることにしたのでしょうか？

トミー・リー・ジョーンズ :「上映直後に意見交換することで、作品の第一印象を新鮮な気持ちで覚えているからです。考えは表現するうちに成長するので、他の人の意見を聞く事で発展したり、変化することもあります。今回はそれが非常に有効的に働いたと思います」

Q : 審査結果以外で、お気に入りだった作品は？

永瀬正敏 :「それは私たち5人の秘密なのですが、他にももっとたくさんの賞があれば全ての作品が賞を獲っていると思います。それほどまでにどの作品も素晴らしかったです」

Q : トミー・リー・ジョーンズの審査委員長としてのリーダーぶりはいかがでしたか？

ヴィッキー・チャオ (趙薇) :「ジョーンズ氏は素晴らしいリーダーでした。独自の意見はもちろん持ちつつ、我々の意見も尊重してくださいました。ずっと言いたかったけれど、実は私はトミーさんのファ

ンで、これまでご本人に言えなかったので、この場で言わせていただきます」

Q : 審議はパッションをぶつけあう熱いものでしたか？それとも穏やかに進んだのでしょうか？

レザ・ミルキャリミ :「とても穏やかな雰囲気でした。特にトミーと僕との関係は親子のような関係になり、トミーは父のように私に接してくれ、現在のイランとアメリカの中とは全くの逆のものでした」

『Of Love & Law』戸田ひかる (監督)

Q : 弁護士カップルのどこに興味を持ったか？

最初は純粋に彼らのラブストーリーに惹かれました。とても不完全なふたりがその不完全な部分を、お互いが受け入れあっている二人のカップルとしての姿に惹かれました。私は海外での生活が長いのですが、みんな同じで当たり前の日本社会で、当たり前から外れたゲイのカップルのオープンでいるふたりが、どうやって生きているのかに興味を湧きました」

『僕の帰る場所』藤元明緒(監督/脚本/編集)

Q : 本作はどう演出し、どう作ったのでしょうか？

映画を見た方々から、ドキュメンタリーのように演じられているとよく言われ、嬉しいのですが、僕はドキュメンタリータッチにしようとは思ってなくて、同じ思いを持って、脚本に共感してくれた方々が出てくれたので、演じるというかそのままの、ありのままの姿を見せて頂きました。あのシチュエーションの中で生きている姿を取ろうとしていたので、真実の言葉で怒ったり、泣いたり、笑ったりしている姿を撮ったのでドキュメンタリーの印象を与えたのかと思います」

『勝手にふるえてろ』 大九明子 (監督)

Q: 観客賞を取れると思っていましたか?

「ノミネートさせて下さった時に、『よくぞこんなに小さな作品を見つけてくださった』と思いました。本心では『もらえるとしたら観客賞かな』などとも思っていました (笑)」

Q: 東京国際映画祭について、今後どのような発展を希望していますか?

「これまで、東京国際映画祭にはあまり来たことが無かったのですが、今回ノミネートさせて頂き、あらゆる仕事を排除して出来るだけ多く劇場に足を運び作品を観て映画祭の空気に触れるようにしました。そこでこれまで来なかったことに、なんて勿体無いことをしていたのかと思いました。

今年の東京国際映画祭にはアル・ゴアさんやトミー・リー・ジョーンズさんが来ているのに、世間の目がこっちに向いていないのが悲しいです。映画を愛する全ての人々でどうか気付いて頂く工夫が大切なんだろうと思うので、学生は当日券 500 円で観られるようなシステムをタダにしてしまう勢いで、若い人たちがタダで遊べる空間にして、その遊びの一環に映画が組み込まれて行動してもらえるようにすればいいなと思いました」

『ペット安楽死請負人』 ヤニ・ボン (プロデューサー)

Q: この映画を誰が一番観てもらいたい?

「この作品の場合は、中年のある種の主義主張を持った男性たちに観てもらいたいです。そういった男性たちが どれだけ馬鹿げ

ているのかを語った映画です」

『迫り来る嵐』 ドン・ユエ (監督/脚本)

Q: 撮影日数はどれくらいで、実際に雨が降っていたのは何日ほどだったのでしょうか?

「この映画 64 日間で撮影しましたが、雨は最初から最後まで全て人工的に降らせていました。この撮影は 3 月だったのですが現地の雨季は 11 月～12 月で、想像を絶するほど厳しい現場でした。しかし、今回の雨を降らせる技術のチームは中国では最も優れたチームだったので、彼らのおかげでこの映画を撮ることが出来ました」

ドアン・イーホン (『迫り来る嵐』)

Q: 雨での撮影はどうでしたか?

「正直大変辛かったです。役者としては映画の出来栄が非常に気になりますが、役者であることを一旦忘れて、この雨の中でこういった表情を出せるのかを探していました」

エドモンド・ヨウ (『アケラットーロヒャンギヤの祈り』)

Q: ロヒャンギヤについての前知識がなくとも、マレーシアの人々には作中の問題などは伝わるのでしょうか?

「私は説教くさい映画を作りたくはなかった。あえて情報は排除して作っています。この映画では歴史的に 説明することはやりたくなく、問いを投げかけることをしたかったのです」

『ナポリ、輝きの陰で』 シルヴィア・ルーツィ (監督/脚本/プロデューサー/編集)。ルカ・ベッリーノ (監督/脚本/プロデューサー/編集)

Q: 作り込まれた世界ではなく、あえて素人を起用することでリアリティを出すという意図がありましたか?

ルカ・ベッリーノ: 「これは意図的なものですが、ある意味で実験的な仕事の仕方をしたと思います。私たちの最初のアイデアは非職業俳優を起用することででしたが、ただ彼らを使うだけではなく、脚本を書くことにも彼らを入れることにしました。特に父親役には脚本に非常に参加してもらい、一緒に作品を作りました。この作品は時系列に沿って作られていますが、最初の僕たちのオリジナルのアイデアから、彼らの演

技の仕方を見ながら一緒に作っていくという方法をとりました。そこで非常に大事だったのは、彼らが純粋さを持っているからこそできるものでもありました」

シルヴィア・ルーツィ: 「もちろん、これからも今回と同じメソッドで仕事をしたいですが、これからはワンステップ上がった感じでやりたいと思います」

『グレイン』 セミフ・カブランオール (監督/脚本/編集/プロデューサー)

Q: 作品名が呼ばれた時の気持ちは?

「賞はもらうものではなく、与えられるものだと思っています。私は私の映画を理解していただくと希望を持っていました。そして実際評価をして頂けたので、そういうことなんだろうと思いました」

Q: トルコは今、映画業界的に注目を集めています。映画の制作はしやすい環境でしょうか?

「コマーシャルやコメディについていうと、撮影の機会は多く、容易に見つけることが可能です。しかし人間の存在性や生きることへの態度などといった問題についての映画というと簡単ではないです。資金源を見つけることはなかなか難しいのです。

ただ、私の場合は前作の『蜂蜜』(2010) がベルリン国際映画祭で金熊賞をとったことで、世界 40 力国で配給が実現しました。それにより本作を作ることが可能になりました。一方で、トルコの文化観光相がかなり広範囲での映画製作のサポートを用意していて、短編も長編もドキュメンタリーもフォローしてくれる場合もあります」

Q: 本作のテーマはどのように考えましたか?

「現在の世界はひどい状況です。気候変動や文化間の問題、各国の間では所得の差が激しく、貧困などもあれば浪費も激しい。病気もあれば土壌汚染、難民、戦争、テロ、CO2 などがあり、そういったものの中で私たちは生活をしているのです。そのなかで自分たちはどこから来てどこに行くのか、私たちは何なのか? そういったことを模索するようになったのが、この作品のルーツになりました」